

特集

もっと友だちと遊びたかった

# 子ども・若者 ケアラー

～ユースサービス協会での取り組み～

兄弟で世話をする  
度合いに差がある

進路選択のときに  
家族から離れることに  
戸惑いがある

友達には  
言えない

夜がどうしても  
遅くなってしまい、  
学校で眠くて怒られた

**「昨日」**、ますます目に触れる機会が多くなっている「ヤングケアラー」という言葉。家事や幼い兄弟の世話、介護といった、大人が担うと想定される役割を、「お手伝い」の範囲を超えて日常的に担っている子どもたちのことを言います。背景として、家族に障がいや病気があるケース、アルコール・薬物・ギャンブルなどの依存症が潜んでいるケースもあります。

一般的にこの「ヤングケアラー」という言葉を使う場合には、18歳未満の年齢の子どもを指しますが、中には18歳を超えてからもケアラーの役割を担い続ける人たち、「若者ケアラー」ともいいます。進学や就職等の将来について考える年代でもなかなかならず、自分のための時間を充分確保しづらく、そのために将来の選択肢そのものが限定されてしまったり、若者年代ならではの困難も生じ得ます。私たちは、「ヤングケアラー」「若者ケアラー」ともに現状を知り、考えていく必要があります。

当協会では、「ヤングケアラー」「若者ケアラー」をあわせて、「子ども・若者ケアラー」という言葉であらわし、2016年度の事業開始以来、様々な取り組みを展開してきています。今回の特集では、それら取り組みの概要と、ともにケアラー事業に尽力いただいている立命館大学の斎藤教授のお話から、「子ども・若者ケアラー」について考えてみたいと思います。

## ぷちメッセージ

### ホッと一息

特定非営利活動法人  
山科醍醐こどものひろば  
事務局長  
品田真孝



私は、京都市山科区、伏見区醍醐地域で子どもの育ちを応援しているNPO法人山科醍醐こどものひろばの事務局で働いています。大学生時代の友人に誘われたことがきっかけでボランティア活動をはじめ、子ども、若者の居場所づくりがしたくてNPOの仕事に就きました。

しかし、コロナ禍で1年以上も活動が大きく制限がされ、あれも出来ないこれも出来ないということが続いています。子どもも大人も関係なく、我慢しなければならない日が続き、不安も不満も積もっていきます。

一方で、出来ないならば仕方ない。出来ないことを理由に「こら辺でホッと一息ついて、立ち止まってみてもいいじゃないか」「せっかくだしゆっくりしていこう」そんな風にも思っています。急に社会環境が変わったため、やり方や考え方も変わっていかねばいけないのかもしれませんが。この我慢しなければいけない日常をいつか振り返った時に、皆さんはどのように思い、感じるのでしょうか。

## contents

- 3 特集  
子ども・若者ケアラー
- 6 高校生と作ったページ  
高校生が「18歳成人」  
について考える
- 8 シリーズ  
はたらく若者
- 10 PICK UP  
協働している団体をご紹介!
- 12 TOPICS  
相談できます
- 14 ユースかわら版  
“きたせい”に行こう! ほか

公益財団法人 京都市ユースサービス協会は、京都市内7か所の青少年活動センターと、子ども若者総合相談窓口、生活困窮世帯の学習支援事業、社会的養護自立支援事業の一体的かつ効果的な運営を指定管理者として受託しています。青少年活動センターは、それぞれの施設・設備に特徴があって、個性的な事業活動をしています。また、厚生労働省から若者サポートステーションの運営を受託し、若者の社会的自立や職業的自立に向けた支援も行っています。

### ユースサービスの理念

「ユースサービス」とは、子どもから責任ある大人へと成長する青少年を支援することです。子どもたちが家庭、学校、地域社会、職場などを通じて成長し、自分自身の興味や関心を高める過程で、必要に応じて助言や情報、または多様な人的・物的資源が得られるような機会を提供します。そして、青少年自身の積極参加によって、青少年と協働した豊かな地域社会を創り出すことを目的としています。





齋藤 真緒教授

立命館大学 産業社会学部教授  
立命館大学社会学研究科博士課程修了  
専門は家族社会学。思春期保健相談士。事例検討会発起人。  
「子ども・若者ケアラー」支援のための予備的考察-＜ケアラー＞  
支援と＜子ども・若者＞支援との接合-」『立命館産業社会学論集』  
55巻2号(2019年)

「ヤングケアラー」に社会的な注目が集まる以前から、事例検討会事業で私たちは、あえて「子ども・若者ケアラー」という言葉を使い、「18歳」の断絶を乗り越える視点の重要性を訴えてきました。

厚生労働省と文部科学省の共同プロジェクトチームは、実態調査の結果を踏まえて、学校などでのヤングケアラーの早期発見・把握や、福祉サービスの柔軟な運用を含む支援策の充実を主たる支援策として掲げていますが、これらは、固定化してしまったケアラーの負担を事後的に軽減することが中心となっています。また、支援策の策定の過程において、子ども・若者ケアラーの声が十分反映されているとは言えません。保護・救済の対象として、「子ども・若者」を位置づけるのではなく、権利主体として「子ども・若者」を真ん中にすえた支援、つまりユースワークの視点を取り入れた支援の構想が求められています。「私たち抜きに私たちのことを決めないで Nothing About us without us」は、障がい者運動に端を発するとても重要なスローガンで、子ども・若者ケアラー支援にも通じるものです。支援一被支援という一方的な関係ではなく、子ども・若者自身が、主人公となって、ケアラーという自分自身の経験を通じて、周囲との関係や社会との関係を見つめなおし、新しいつながりをつくっていく、そういう場や関係性を提供できるのではないかと考えます。

家族にかかわるケアはとても複雑なものです。家族のために何かしたいという気持ちと、自分の人生のための選択が相対立することもあり、ケアする子ども・若者はいろいろな葛藤を抱えます。そして何よりも、子ども・若者は自分たちの家族しか知らないで、それを「当たり前」と思ってしまうがちです。ほかのケアラーと出会い、いろいろな気持ちや考えに触れることで、これまで想像しなかった、自分らしい人生のための新しい選択肢を見つける、そんな可能性を秘めた出会いの提供を協会には期待しています。

### アクションリサーチプロジェクト

齋藤教授と「大学生ケアラーの会」メンバーが発起人となり、今年7月より立ち上げに向けて動き始めた新しいプロジェクトです。このプロジェクトは、「ヤングケアラー」という言葉が浸透してきている一方で、「ケアラー」について議論する場に当事者や元当事者が不在であることに対する問題意識から始まりました。アクションリサーチすなわち社会的実践と結び付けた研究を通して、当事者の声を元にした支援策を提言したり、当事者の声をより具体的な形にするための活動を考えたりすることを目指しており、そこにユースサービス協会もコミットメントしていきます。



### 事例検討会

子ども・若者ケアラーの実態を把握すること、また、支援者の領域を超えたネットワークの中で支援策を検討することを目的に、2017年3月からこれまで14回実施してきました。子ども・若者ケアラー当事者や彼らと関わる支援者からの事例報告をはじめとして、事例に関する意見交換やゲスト対談も行い、当事者・支援者両方の視点から「ケアラー」について考える場となっています。昨年度末に実施した事例検討会には、北海道や関東といった遠方からの参加や高校生の参加もあり、関心の高まりが感じられました。



【これまでに報告のあった事例】  
● 保健室にやってくる生徒の話から見える高校生ケアラーの実態(高校養護教諭より)  
● 精神疾患がある家族のケアについて(母親のケアを経験した元若者ケアラー当事者より)  
... etc

### 動画作成

当事者のインタビューをベースにしたショートムービーを作成し、次の目的を持って発信しています。

- ✓ 「一人じゃないよ」というメッセージの発信
- ✓ 自分のケアを客観的にとらえる一つの材料にしてみよう
- ✓ ケアをしている若者同士がつながれる場の周知(『当事者のつどい』)
- ✓ 自分のケアを見守っている大人(支援者、協会といった相談先の周知)

- ✓ 「子ども・若者ケアラー」についてまず知ってもらおう
- ✓ 身近な若者の状況に対する捉え方に、「ケアラー」という視点を増やしてもらおう
- ✓ ケアをする若者について考える場があることの周知(『事例検討会』)
- ✓ 渦中にある若者へのプロジェクト、協会等の情報を提供する



協会HPで動画をチェック!

### 当事者のつどい 『いろはのなかまたち』

2018年10月より、中学生から30歳までの子ども・若者ケアラー当事者や経験者の語りの場『いろはのなかまたち』を開いています。「自分の思いを他の人に話したい」「同じ立場の人に会ってみたい」「もしかしたら自分もケアラーにあてはまるかもしれない」等をきっかけに集まったメンバーで、互いの経験や思いを語り合います。昨年11月以降は毎月第2土曜日14時から定例開催となり、コロナ禍においてはオンラインでも活用しながら場をひらいています。

### 参加者の声

私にとってつどいとは、家族に言えない複雑な気持ちや人間関係の悩み、自分のメンタルヘルスのことを打ち明けられる場です。

